

人と豚に優しい分娩について
～昼間分娩と、ホルモン剤・入手による子豚引き出しの影響～

○大小田勉・小村喜久男・生駒エレナ・石原康弘
(鹿児島農総セ畜試)

【目的】

豚の分娩は生理上、夜間が多く、多産のため分娩時間が長い。生産農家にとって、夜間の分娩介護は大きな負担であり、他の動物に比べ未熟な状態で生まれてくる子豚にとっても、体温を奪われやすい冬場などリスクの高い状態となる。

そこで、昼間に分娩させ、更に人が介護している時間帯（管理者の勤務時間帯）に分娩を終了させるため、ホルモン剤の多回投与と、陰部から産道への入手による子豚の引き出しを試み、現場で一番懸念される「母豚の繁殖障害」を調査し、若干の知見を得たので報告する。

【材料および方法】

調査①として、分娩誘起剤における昼間分娩率と死産率を調査した。

供試豚はパークシャー種 23 頭、全頭初産とした。分娩時期は 2013 年 1～2 月、分娩誘起の方法として、種付日より 114 日目の am7:00 に PGF2 α 類縁体であるクロプロステノール製剤を 2cc 筋肉注射し、115 日目の 6:30 から 24:00 まで分娩介護を行った。

調査②として、介護時間内に全頭を分娩させるため、朝から分娩兆候のない豚に対し、子宮頸管の弛緩を促すエストリオールを 2cc 筋肉注射し、その 20 分後、子宮収縮と陣痛を促進させる脳下垂体後葉ホルモン剤であるオキシトシンを 5cc (50 単位) 筋肉注射した。このセットを状況に応じて 3～5 回繰り返した。更に、破水後 3 時間経過しても分娩が始まらない豚には、陰部から産道へ手を挿入し、子豚を引き出した。

介護時間内に全頭分娩した 10 腹のうち、無処理区 5 腹、ホルモン剤投与のみ (以下ホルモン区) 2 腹、「ホルモン剤+入手」3 腹について、

表 1. 子豚への影響

区分	腹数	産子数	死亡	引出子豚	引出率	死産率	離乳時育成率
無処理	5腹	38頭	3頭	0頭	0%	8%	94%
ホルモン投与のみ	2腹	10頭	0頭	0頭	0%	0%	100%
ホルモン+入手	3腹	22頭	1頭	13頭	59%	5%	95%

分娩子豚への影響をみるために、死産率、離乳時育成率を調査し、母豚の繁殖への影響をみるために、発情期間、離乳後受胎日数、受胎までの授精回数を調査した。

【結果および考察】

調査①では、介護時間内、時間外、「時間内+時間外」の分娩は、23 腹中、11 腹、7 腹、5 腹で、時間内分娩は 48%と半数に満たなかった(データ略)。また、各区分での死産率は、それぞれ 5%、44%、9%で、介護時間外分娩での事故率が極めて高いことがわかった。時間外は未明から分娩開始したものが多く、袋子や体温低下によると思われる衰弱死が多くみられた。未明からの分娩を防止し、子豚の事故率を低下させるためには、分娩誘起剤の投与時間の再考が必要と思われる。

調査②では、無処理区、ホルモン区、「ホルモン剤+入手」での死産率、離乳時育成率から、ホルモン剤の多回投与や、入手による子豚の引き出しは、分娩子豚にほとんど影響を与えないことがわかった(表 1)。

一番心配される母豚の繁殖への影響は、3 区とも、全頭が 1 回の授精で受胎したことから、繁殖障害への懸念は小さいと思われた。

離乳後の受胎日数が「ホルモン剤+入手」で他 2 区よりも約 20 日長くなった。これは、子宮深く何度も手を入れ、途中で引っかかっている子豚を引き出したことで、子宮の回復が遅れたためと思われる(表 2)。

昼間分娩は、高齢化の進む養豚農家にとって、人に優しい方法であり、介護時間内に分娩させる技術と合わせ、子豚の事故を防止し、生産性を高めるうえで、有用な手段であると思われる。

表 2. 母豚への影響

区分	腹数	分娩時間	発情期間	離乳後の受胎日数	受胎まで授精回数
無処理	5腹	1:13	3.2日	26日	1回
ホルモン投与のみ	2腹	0:58	4.0日	26日	1回
ホルモン+入手	3腹	2:11	3.7日	47日	1回